



予科練の教育



断じて敢行すれば
鬼神もこれを避く
— 司馬遷、「史
記」より

koberyol

1.

起床から巡検（就寝）までの行動がすべて躰教育である。

海軍は海上での任務であるから、精神面の躰教育に重点がおかれていた。起床、食事、掃除を基本に連帯責任が課せられ、相互の協調が自然と醸成された。

基礎体力を作るための体操として海軍体操が毎日、行われた。

海軍体操には、第一体操と第二体操があり、第一体操は簡易でラジオ体操程度のものでだれでもやれる内容のものだが、第二となると頭脳的要素が要求される。すなわち一つの号令で左右別々の行動を同時にやるからである。

2.

また躰教育の一環の一つに清掃があるが、これは罰直的要素が含まれた教育と思った。

まずは甲板掃除である。これは自分たちが毎日、使用しているテーブルをすべて甲板から通路に移動することからスタートする。ようするに甲板に何も置かない、活動しやすい状況にしておくのである。

掃除用具はオスタップ（洗濯桶）に水をいれ、その水を甲板にまく。甲板は水びだしになる。これをソープ（甲板用棒雑巾）で甲板をこする。教育指導員の号令のもと、「ソープ用意」で12名が甲板の端から端へと一列横隊で押してゆく方式である。

足、腰を鍛えるためには理想的方法であるものの、端から端まで30メートルくらいはあるそれを、短距離競技のスタート時のスタイルで尻を上げ、押しながら甲板を磨くことになる。これを「押せ、押せ」の号令で何回もやらされるのである。

心臓や肺はフウフウで足腰は疲れ、だんだん動きは鈍くなる。そこへ待っているのが「海軍精神注入棒」である。体の限界という時点から精神の限界ということが知れるのも、この甲板掃除である。

船の上での生活は駆け足であるから構内の移動は、いわゆる「駆け足」、「休め」以外はすべて駆け足の適用である。歩くことは許されなかった。

3.

教育の中で欠かすことができないのが『通信教育予科練』であり、予科練のカリキュラムの中でもっとも多く時間が割かれていた。

通信とは、「無線」、「手旗」、それから「発光」。しかし、「発光」はやらなかった。飛行気乗りにとって無線教育を身につけることは鉄則であった。私にとってはじめて見聞きするわけで素直に受け入れにくい学科であった。吸収するのも遅かった。

たとえば、無線通信に使用されているモールス信号は、短音符と長音符の組み合わせにより成り立っている。これは理屈ではなく、構造音を体で吸収することだと感じた。

早実時代、K・M君から野鳥の鳴き声を教えられたものだが、これが役に立った。野鳥の鳴き声で、今何の鳥の声かという聞く力がすでに育成されていたのだ。

無線は送信も大切だが、受信の方がさらに重要で、かつ難しいから受信を重視した時間の配分が組まれていた。ドイツで開発された方法で「●■」（ト・ツー）を一つの音の記号として聞き取り、「イ」と覚える方法で、すべての音を反復に反復、朝から晩まで「ト・ツー」の生活に変化して行った。

さて座学（一般教養学科）は海軍省で制定された資料によると、勉強する時間割が定められていたが、あまり活発な展開でなかった。これは終戦まぎわで教員の不足ではないかと推測される。

4.

私がつらかったと思った学科は、午前「陸戦」、午後「カッター」、または「遠泳」という時間、体力のない私にとってやっとならぬほどの大変さであった。

陸戦は事業服をまとい、足には陸軍用のゲートルを着けて久里浜の海辺を「伏せ」や「匍匐前進」で走りまわる。まるで犬のようで、砂が「腹」や「ヘソ」の中に入って困ったし、事業服は汗まみれ、泥まみれなるので、これを時間を見つけて洗濯しなければならなかった。洗濯干し場で服など、盗難にあいはしないかと心配したり、大変だった。

横須賀通信学校は現在、久里浜の防衛大学とかの由だが、訓練校としては立地条件に恵まれた所である。校庭は広々として前は海。海に出るには校庭の前に準備されたカッターがあるが、入隊してカッター（短艇）に乗り込むには夏の終わりだったと思う。短艇を、定員は右舷6名、左舷6名、各合わせて12名で漕ぐ。

長さ4メートルもある櫂、重さは15キログラムもある内の櫂は、丸太棒といった感じ。私の細腕

で握ることはできない。両手でさえ持ち上げる「櫂上げ」は、全身を使う始末。その櫂の先端を海上の水面45度の角度から水中に入れ、全身の力で漕ぐ。班長の一段と鋭い命令で櫂を海側外に出す「櫂用意！」の聲がかかると、櫂に自分の体が引っ張られて自由にならない。前の艇座に足のつま先に力を入れ、足の短さが何とももどかしく、艇座から尻がはずれてしまいそうになる。

水中の櫂は、前後のリズムを合わせて、両手でと言うより、全身で漕ぐ。また波と風によって艇が上下するのでリズムは取りにくい。短艇内は素足だから、前の艇座につま先がかけられれば力が出せる。これがコツであり、要領だと思った。

5.

海軍は海上生活が基本だから水に親しみを持たなければならない。ところが事前の調査でわかったことは、泳ぐことの苦手な者が若干名いるということだった。が、思い切って行け、との一言で、すべての練習生が夏の遠泳に挑戦するということになった。久里浜はペリー来航の海で、大きな碑が建てられたいる記念された特別な海浜である。

さて、風のない穏やかな日が続いた遠泳の日、班長が持ってきたのは6尺の赤フンドシの水泳帯と、赤い帽子である。素っ裸になって、この水泳帯を締める。女子学生のようにもじもじしながらフンドシをつけていると、「急げ！」の命令が飛ぶ。何事にも命令である。「集合！」で赤帽子をかぶった赤フンドシが列を作った。その光景、全員が赤いものをつけている。はや何と表現してよいものやら。

「出発！」で素足になって砂浜に向かった。砂浜は夏の陽ざしで足の裏が焼けるようだった、班長や指導員はカッターを準備して、万一の救護態勢であった。練習生の平泳ぎの列に横に二艇、ピタっとついてきてくれたのである。

海は静かで、絶好の遠泳日和だった。水も冷たいとは思わなかった。海で泳ぐ孤独は、練習生を忘れる程の自己を感じ、何か豊かな気持ちであった。

先頭は泳ぎのうまい者、中間は苦手な者、つぎに泳げない者、後尾を飾るのは泳ぎに自信がある者といった具合にサンドイッチの体制である。

海軍は、速度より長時間の泳ぎを主眼としている。訓練であるので波を上手に受けての長時間の遠泳である。一列の赤帽子は事故もなく、60分くらいで帰校となった。しかし、唇は紫色であったことは記憶している。

6.

海軍教育の特色は、なんといっても躰教育である。

躰教育と言うと行儀作法を直感するが、組織の人間関係を整えるのは、根本は人としての礼節、相手の人格を尊重すること、自分と同じように相手を尊重する、相手に尊重される自分自身である以上、立派な人間に自分で自分を育ていかなければならない。